

2025. 2. 2 (日) 使徒 21 : 27 ~ 36

21:27 ところが、その七日の期間が終わろうとしていたとき、アジアから来たユダヤ人たちは、パウロが宮にいるのを見ると、群衆をみな扇動して、彼に手をかけ、

21:28 こう叫んだ。「イスラエルの皆さん、手を貸してください。この男は、民と律法とこの場所に逆らうことを、いたるところで皆に教えている者です。そのうえ、ギリシア人を宮の中に連れ込んで、この神聖な場所を汚しています。」

21:29 彼らは、エペソ人のトロフィモが町でパウロと一緒にいるのを以前に見かけていて、パウロが彼を宮に連れ込んだと思ったのである。

21:30 そこで町中が大騒ぎになり、人々は殺到してパウロを捕らえ、宮の外へ引きずり出した。すると、ただちに宮の門が閉じられた。

21:31 彼らがパウロを殺そうとしていたとき、エルサレム中が混乱状態に陥っているという報告が、ローマ軍の千人隊長に届いた。

21:32 彼はただちに、兵士たちと百人隊長たちを率いて、彼らのところに駆けつけた。人々は千人隊長と兵士たちを見て、パウロを打つのをやめた。

21:33 千人隊長は近寄ってパウロを捕らえ、二本の鎖で縛るように命じた。そして、パウロが何者なのか、何をしたのかと尋ねた。

21:34 しかし、群衆はそれぞれに違ったことを叫び続けていた。千人隊長は、騒がしくて確かなことが分からなかったので、パウロを兵営に連れて行くように命じた。

21:35 パウロが階段にさしかかったとき、群衆の暴行を避けるために、兵士たちは彼を担ぎ上げなければならなかった。

21:36 大勢の民衆が、「殺してしまえ」と叫びながら、ついて来たからである。

#### <説教>

エルサレムに着いて第3回伝道旅行を終えることになったパウロたちを、エルサレムの教会の兄弟たちは喜んで迎え入れました(17)。パウロはルカたちを連れてエルサレム教会のヤコブや長老たちを訪問し、あいさつをし、パウロが〈自分の奉仕を通して神が異邦人の間でなされたことを、一つ一つ説明し〉ました(18-19)。そのときにギリシアやアジアの諸教会からのエルサレム教会への献金や支援物資を渡すこともしたのでしょう。ヤコブや長老たちはパウロの報告・証しを〈聞いて神をほめたたえ〉ました(20)。

と同時に彼らはパウロに、エルサレム教会に何万となくいるユダヤ人キリスト者たちが聞かされている噂に関わる心配事と、その心配事を取り除くための提案をしました。噂とは、異邦人の中にいるすべてのユダヤ人たちに、モーセに背くようにとパウロが教えているということでした(21)。もちろんパウロが本当の意味でモーセに背くように(それは神に背くようにと実質的には同じことになるわけですが) 教えていたわけがありません。確かにこのときのエルサレムの多くのユダヤ人キリスト者たちはパウロのことを良く知らなかったということもあったのでしょうが、そんな間違っただけの噂が信じられ、ユダヤ人キリスト者たちのキリスト信仰が揺らぎ、信仰から離れるようなことは避けるべきでした。何よりも、その結果神がほめたたえられなくなるこそ避けるべきでした。そのための提案が、(律法を守って) 誓願を立てている人たち 4人と一緒にパウロも律法に定められたこ

とを行い、その上、彼らの必要な費用までも出してあげることで、パウロも律法を守って（つまり神に従って）正しく歩んでいることが皆に分かるようにしようということでした(22-24)。人をつまづかせないこと、そして何よりも神がほめたたえられることこそパウロの目指すところ、願いであり、喜びでしたので、パウロもヤコブたちの提案を受け入れることにしました(26)。

さて、誓願に関わる清めの〈七日の期間が終わろうとしていたとき〉(27)に、パウロたちがいた神殿で大騒動が起こり、パウロは殺される直前にまでなりました(27-30)。騒動の首謀者はユダヤ人たちでした。〈アジア〉(27)とは具体的にはエペソということでしょう。彼らがエルサレムに来ていたのは五旬節の祭りのためでした。更には執念深くエペソから密かにパウロを付け狙って来ていたことも大いに考えられます。パウロのエペソ伝道については19章に記されていました。また20章(18-35)にもパウロ自身の言葉で振り返っていました。「私は、ユダヤ人の陰謀によってこの身に降りかかる数々の試練の中で、謙遜の限りを尽くし、涙とともに主に仕えてきました。」(20:19)と言ったように、ユダヤ人たちからの妬み、恨み、憎しみ、反抗の数々を受けながらの3年間のエペソ伝道のでした。彼らは十字架で殺されよみがえった（とパウロたちが言う）イエスを救い主キリストだと教えているパウロを、またユダヤ人のくせに異邦人と交わり異邦人にまで「神の国」について教え、救われるためにはイエスを信じるだけでよい、割礼を受ける必要などないと教えているパウロを生かしておくべきではないと考えていました。

そんなユダヤ人たちにとって、絶好の機会が来ました。彼らは〈パウロが宮にいるのを見〉て、五旬節で集まっていた大勢のユダヤ人〈群衆〉を〈扇動〉し叫びました(28)。「(律法を熱心に守り行っている)イスラエルの皆さん！」と言うわけです。訴えはパウロが〈民と律法とこの場所に逆らうことを、いたるところで皆に教えている〉ことに加えて〈ギリシア人を宮の中に連れ込んで、この神聖な場所を汚してい〉るということでした。神殿では、ユダヤ人でない異邦人が「異邦人の庭」の先の内庭に入ることは禁じられ、破れば死刑に相当するとされていました。ただし、このときパウロがユダヤ人たちの訴えのようにトモフィロを実際に内庭に入れていたとは考えられません。パウロとトモフィロが一緒にいるのを彼らが〈以前に見かけてい〉たのはエルサレムの〈町〉であって神殿の中ではありませんでした(29)。もう長い間、いつもパウロを嫉み恨み憎み、何とかして無き者にしてやりたいと思っていたユダヤ人たちの先入観が、パウロが〈ギリシア人を宮の中に連れ込んで、この神聖な場所を汚してい〉る決めつけたのです。そんな「悪魔の策略」に〈町中〉のユダヤ人が簡単に乗ってしまいました(30)。その姿はまさに熱狂的、狂信的でした。かつてステパノに対してなされたことと非常に似ています(cf.6:11-14。7:57-58)。また、このユダヤ人たちの〈大騒ぎ〉(30)、〈混乱状態〉(31)、〈それぞれに違ったことを叫び続けていた〉(34)様子は、あのエペソの異教徒たちとほとんど同じでした(cf.19:28-34)。皮肉と言えれば皮肉なものです。

しかしそんな中で、パウロがいのちを賭けて信頼するイエスはパウロをお助けになりました。パウロ自身は〈主イエスの名のためなら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことも覚悟していま〉した(21:13)が、ここでパウロが殺されることはイエスの御意思ではありませんでした。イエスはパウロのいのちを助けるために〈ローマ軍の千人隊長〉をお用いになりました(31)。神殿の北西部分に接してローマ軍の要塞があったので、そこに

いた〈彼はただちに、兵士たちと百人隊長たちを率いて、彼らのところに駆けつけ〉(32) ことができました。〈人々は千人隊長と兵士たちを見て、パウロを打つのをやめ〉(32)、パウロの身柄はユダヤ人たちから〈千人隊長〉に移されました(33)。千人隊長は冷静に法律に則って処理しようとしたがユダヤ人群衆は半狂乱のままでした(34-36)。なおも隙あらばパウロに〈暴行〉(34)を加え、〈殺して〉しまおうと熱心に狙っていました(36)。

しかし彼らが「殺してしまえ」と熱狂すればするほど、イエスもまた千人隊長とその兵士たちによってパウロをお助けになったのです(35)。考えて見れば、イエスご自身が、ご自分のしもべパウロより先にエルサレムで「殺してしまえ」との群衆の叫びの中を歩まれました(ルカ 23:18。ヨハネ 19:15)。そして、パウロのために、私たちのために、十字架につけられて死なれたのでした(そしてよみがえられました)。このイエスの恵みを受けたパウロはイエスのための苦しみも、死までも喜んで覚悟していました。イエスを信じ、イエスに従うための苦しみも、死までも喜んで覚悟していました。自分が〈キリストのために受けた恵みは、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。〉(ピリピ 1:29)と知っていました。それで、イエスを信じない人々の熱狂的な殺意の中でも、悪魔の攻撃の中でも恐れることなく、イエスに自分自身をお任せし、苦しみを耐え忍んだのでした。そんなパウロに対して、イエスは異教徒のローマ軍の千人隊長を用いて正義を行わせ、パウロをお助けになりました。イエスのみこころが行われたのでした。

私たちにもパウロに注がれたのと同じイエスの恵みが注がれていることを信じ、周りの人々がいかに熱心に、熱狂的にまでイエスに反対し、信仰に反対し、イエスから引き離そう、離れさせようとしてきても、その苦しみを耐え忍び、イエスに従い続けていきたいと願います。いっそうのイエスの恵みを祈り求めます。